

水さまざま、いかに付き合うか

第三回世界水フォーラム事務局長 尾田 栄章

ご紹介いただいた尾田です。まず下水を文化として捉え、それに取組んでおられる皆さま方に敬意を表したいと思います。今日は、現在取組んでいる「日本水フォーラム」の立上げ、これは日本の水問題というだけでなく、海外の水問題にいかに関与するか、海外協力という視点で動き出す組織ですが、それに関連したお話をさせていただきます。

パリの試み

最初にご紹介するのは、パリ・プラージとい、セーヌ河畔に海岸を作り出すプロジェクト

です。ご承知のようにパリはセーヌ川の中流域にあつて、海岸があるはずもないのですが、人工的に海岸を、それもセーヌ右岸を走る自動車専用道路に作り出すのです。夏の間だけ車をとめ、専用道路の半分まで砂を入れ、川岸にはやしの木を入れます（写真1）。人工的に海岸を作り出す計画を二〇〇二年から始めています。すなわち今までのように河川に蓋をしてそれを道路に変えるという大きな流れが、逆に道路になつてくるものを水辺に変えていくという方向に動き出しています。これはかつて河川を下水道にし、蓋をしてしまったものを元に戻そうと

いう動きともつながっています。このように、都市の中に水辺環境を取り戻す重要性に漸くわれわれは気がついてきたのです。

パリはご存知のとおり交通混雑の多いところ
です。大半のパリジャンがパリから脱出する夏



写真1 セーヌに出現した海岸*

のバカンスシーズンとはいえ、このような形で水辺空間を作り出し、フランスや世界から集まってくる観光客とパリに住んでいる人たちの交流の場をつくっています。それこそが観光都市パリがやるべき仕事だという考え方でもあります。

古代ローマ人の作った下水道

下水文化ということで私が触発されたのは、紀元前一世紀か二世紀ごろの古代ローマ時代に、当時「リュテス」と呼ばれたパリを占領して古代ローマ方式の都市を作ったときに造った浴場です（写真2）。現在は中世美術館となっており、その地下で風呂の下に、湯を沸かす奴隷——当時奴隷がいたかどうかはつきり判りませんが——、そういう労働者が働く空間がありました。そこに下水道があり、セーヌ川に続いています。大事なのは、この浴場に水を持つてくるために

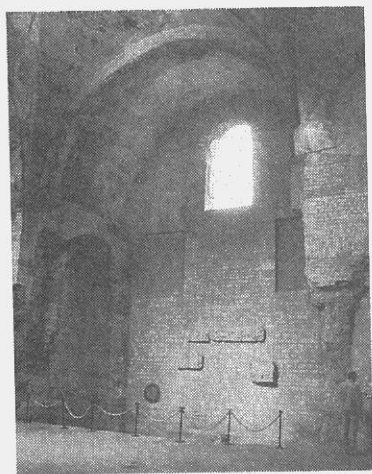


写真2 クルニー共同浴場*

十数キロメートルの水路を引き、溢れ出た水をセーヌ川に流すのに下水道を造り、古代の都市を清潔に保つことをやってきた遺跡が今もパリの真ん中に残っているということです。古代ローマ時代に水を運んだ施設の一部が残っています。ピエール川というセーヌ川の支流を渡るために作られた水管橋です（写真3）。古代ローマ時代の水管橋と、その横に十七世紀に作ら

れたものがあり、その上に更に継ぎ足して十九世紀につくられたものは、今も使われていると聞きました。私が登って見たときは水が流れていませんでしたが、いずれにしてもこのようなレンガ造りの水管橋を造り十数キロにわたって水を運搬することによって、パリに公衆浴場をつくりました。自分達の生活を楽しむと同時に、その水は町をきれいにするために使っていたのです。

ところがローマ人が去ったあとのパリは、存知のとおり糞まみれの町になりました。中世のパリは悪臭で有名で、当時のパリ市長自身が「自分がパリに戻ったと実感するのは、町中からむせ返る汚いにおいである」という町になっってしまうのです。そのように古代ローマ人は、水を使って町をきれいにすることに非常に長けていました。地中海世界の半乾燥地帯ですから、水を潤沢に使い、さきほどの公衆浴場でも水が

常に溢れ出ているようにしました。ローマ人にとっては水が常に溢れ出ているということが大事なのです。溢れ出ていない浴場は浴場の名に値しないのです。すなわち非常に貴重なものを潤沢に使うことに価値を置いていたということでもあります。

バーチャルウォーターという考え方

第三回世界水フォーラムを日本で開くことになったときに、日本で世界の水問題を議論する必然性を考えました。日本は言うまでもなく島国です。その国でなぜ世界の水問題を考えるか自問自答していました。

その時事務局が思い至ったのは、日本は色々なものを輸入しているが、その輸入品には水が使われており、考え方によつては海外から水を輸入しているのと同じであり、だからこそ世界の水問題にわれわれが取組

まねばならないということでした。実際にどのくらいの水になるのかを試算すると綿製品も一部入っていますが、主として作物と食物だけで、約四五〇億立方メートルの水が必要となります。これを日本人の水の使用量で計算しますと約三億七〇〇〇万人分の飲み水、上水道量に相当します。それだけの莫大な量の水を使つて生産し

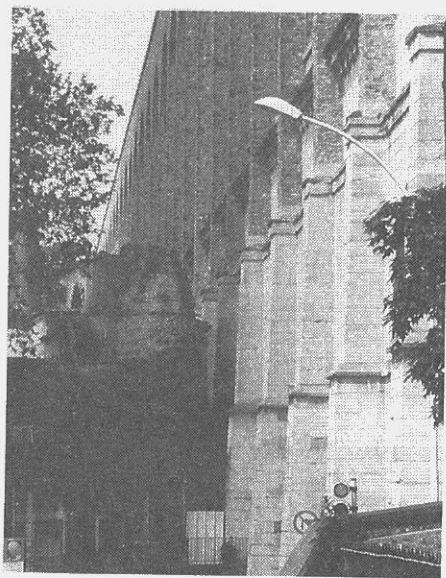


写真 3 ローマ時代からの水管橋*

たものが輸入されているのだという考えを打ち出しました。

ちょうど同じ頃に東京大学の沖大幹先生が、

同じ問題に取組んでおられバーチャルウォーター、仮想水と名づけておられました。またイギリスでもバーチャルウォーターと、同じ考え方を出していました。同じような考え方がそろい、共通理解が出来ました。さらに同じ綿花を作るにしても、一番水を使わないところで作ればいいではないか、そこから輸入すれば、世界中の水の使用量を減らすことが出来るという議論まで展開されました。水使用原単位のもっとも少ないところで作ればいいのではないか、これも大変な暴論ですが、といった議論が世界的な潮流になっていて、それを実現するにはどうしたらいいかという議論がなされています。私は、これは主客転倒だと思いますが、水を経済財として捉えるのは反対だというNGOの人たちの

議論にもつながっています。

水道の民営化

次に、商品としての水の価値はどうだということですが、これは皆様が十分にご存知の通り、上水道の価格は日本では一八一円、下水道の処理に二〇一元、大体一立方メートルあたり四〇〇円のお金がかかっています。おおよそ一年間に一五〇億トンですから六兆円の市場です。トヨタ自動車の世界で一〇数兆円の販売額ですから、その半分くらいの経済価値を持った市場です。民間企業が参入をしたいとの動きが出てくるのも、それだけ大きな市場価値があるということの裏返しです。

そういうことを受けて水道の民営化の議論が進んでいます。ご承知のようにヨーロッパの主要都市は大部分の水の供給・管理運営は民営化されており、受注している企業が今度はそのノ

ウハウを使って市場に進出してきています。いまアジアの市場で激烈な競争が起こっており、特に中国の市場を狙っています。もちろん日本にも参入したいと考えていますが、なかなか日本は参入障壁が高く、また日本自体に成熟した技術体系があるということではなかなか日本には入り難いので、中国を狙っています。

民営化といっても、程度の差がありまして、どういう形の民営化がいいのかという議論が行われていますし、民営化すること自体への反対が非常に強いのも現状であります。特にカナダ人評議会のモード・バーロウさん、日本でも彼女の本が出版されているのでお読みになった方もいらっしゃると思いますが、水で利潤を生むということは一切ダメだという運動を展開されておられます。

今のままで手をつけずに済むということならば、それでいいのですけれど、現実の水問題は

非常に悲惨な状態であります。

民営化の事例で申し上げますとロンドン市はもともとチームズウォーターオーソリティーというパブリックの公的機関がやっていたんですが、サッチャーのときに民営化をされてチームズウォーターという会社になりました。これをドイツの企業、元々は電力をやっていた会社が買収をして、いまやロンドン市民は敵国であったドイツの会社が管理する水を飲んでいます。パリは、元タオンデオ（現スエズ社）とヴェオリアの二つの系統の会社が水道に限らず下水道も含め牛耳っています。

元々フランスでどうして民営化が始まったのかというと、水道施設が老朽化し、それを更新しなければならなくなったときにフランスの市町村はお金に困っていました。その点では今の日本の状態と非常に似ているのですが、その更新まで含めて民間企業にやらせる

ということをしたわけです。面白いのはマルセーユ市で、オンデオとヴェオリアの前身の会社に合併会社を作らせました。四八%ずつ資金を出させ、残りの四%をマルセーユ市が出し、経営上で二社間で問題が起きたときはマルセーユ市がキャスティングボードを握るというシステムを考えました。

「水の声」から

第三回世界水フォーラムをやってつくづく感じたのですが、日本で五〇年前、百年前に起こっていたことがそのまま世界各地で起こっているということです。世界の人たちから、水に関する声を集めたのですが、その中には、「水汲みに私は人生の半分を費している」、「僕は毎朝学校へ行く前に二キロメートル歩いて水汲みに行く」、さらに「今僕らには水道がある。しかし、家のたて穴トイレはいつも満杯である」という

ような水の声があります。

これは昨日の日本水フォーラム記念会でも橋本龍太郎発起人代表がみずからおっしゃったことです。第三回世界水フォーラムで「世界こども水フォーラム」が開かれました。ここで日本の高校生が自分達は水の安全性を確かめるために川の水質調査を行っていると発表したところ、アフリカの子どもから意見が出まして、そんなことが水の安全と言えるのか、われわれにとつて水の安全というのは、水汲みに行く途中でレイプされるといった危険から自分の身を守り、水を汲んでくる、それがわれわれにとつての水を確保する上での安全なのだと。そのような議論を前にして橋本会長自身立ちすくんでしまったと、おっしゃっていました。世界では下水道がない、水処理する施設がないのは当たり前前の話で、「トイレがない」「千八百名の子どもがいる学校で便所が二つしかない、しかもそ

の一つは先生用で使えない。トイレに行けないのだから学校にも行けない」という声が寄せられたように、今の世界の実情としてはトイレがないというのが一番大きな問題です。今年のCSD（持続可能な発展委員会）ではヨハネスブルグサミットでミレニアム開発目標、すなわち二〇一五年までに現在は安全な水にアクセスできない人達の数を中心に減らそう、また清潔な水環境を享受できない人たちの数を半分に減らそう、という目標が確立されました。それが人類共通の課題となってきた背景にはこのような問題があるわけです。下水文化研究会の、「下水道」ではなく「下水」をどう考えるかという議論は、世界の人たちの共通の大きな認識になってきています。

日本の経験を活かす

橋本龍太郎元総理が国連事務総長の諮問機関

である「水と衛生に関する諮問委員会」の議長役を勤められることになっています。アナン事務総長の問題意識としても健康問題の根底には水問題があり、水問題を解決すれば健康問題は相当部分が解決できます。もう一つの大きな要素が衛生すなわちサニテーションで、トイレを整備することを含めて下水をどうするかです。その時のイメージとしては日本がかつて行っていた循環型下水処理というか、再利用の考え方をもう一度見直すことが、世界にとっても非常に大事になってくるのだらうと思います。

明治以降、特に第二次世界大戦の敗戦以後、ヨーロッパ型の下水道システムが持ち込まれました。それが本当によかったのかどうか、私の子どものころ、「生野菜は食べるな」「アメリカでは生野菜は尿尿をかけていないから食べられるが日本では食べられない」というようなことを言われました。下水道というのは世界の最先

端の技術でこれを導入することが非常に大事だ、という考えを頭から植え付けられたのですが、本当にそれでよかったのかどうか。かつて自分達が持っていたシステムをもう一度見直して、よりよいものに変えて導入することを考えるべきであつたのかも知れないと思っています。場合によっては今からでも遅くないわけで、そういうシステムに戻してよいかを議論する必要もあると思っています。そして、そういう技術こそ発展途上国へ持ち込むべき技術ではないかと考えます。

日本の常識とは違う下水道への認識

例えば国連の場で議論すると、ともすれば今のヨーロッパスタイルの下水処理技術をそのま持ち込もうとします。しかし、発展途上国の問題は、ヨーロッパとは背景が違います。例えばパリの下水道は、もともととは便器の中身を窓

から投げ棄てていたのですが、それを何とか早くセーヌ川に流してしまおうと、大きな下水管を地下に作って、汚水はそこに集めて流す、処理せずに流してよしとしていたのです。時代が下がるにしたがつて下水を畑に撒くようになり、アシエールのねぎは非常においしいと評判だったそうですが、それはパリの下水を撒いて作ったねぎでした。処理をしないで流すというのが彼らのシステムだったのです。

日本で下水道といえば終末処理場を思い浮かべますが、世界の常識では必ずしもそうではないと思うようになりました。その点で戦後のアメリカによる下水道が衛生的で、われわれのが非衛生と刷り込まれたものが、今なお続いているようで反省しています。

翻って日本のODAが何をしているのかというと、インドネシアのある町で下水を日本が援助します。日本は終末処理場を援助し、そのた

めに数十億円を負担します。しかし、終末処理場を持って行くためにコレクターとして下水管が必要なわけで、これはオランダがやりました。結局、その町の人たちの認識では、下水道のシステムはオランダ人が作ったことになります。日本人の感覚で言うと、一番大事な金のかかる処理場は日本が作ったのですが、彼らの認識ではオランダです。

第三回世界水フォーラムのこと

今、地球上では、毎年三百〇五百万人が安全な水を利用できないことによって命を落としています。ユニセフの統計では、安全な水を飲めないことによって引き起こされる病気で、世界の子どもの命が八秒に一人失われています。なおかつ、そのような人たちは、病名がはっきりせず、ただ下痢ということで一括りにされて命を落としているのが実態です。貧困問題のベ-

スにある水問題を解決すればこのような問題も解決できることになってくるわけです。

それから今世界の色々な会議へ行くと、水は基本的な人権かということが議論されています。私はこのような議論は問題の解決につながらないと思いますが、欧米や中南米などで会議に出てくる人たちはこういう議論が大変に好きです。要するに Basic Human rights か Basic Human Needs かどうかという議論です。前者であれば地球上の皆が取り組むべき課題だという意識なのでしょうが、そういう議論をすることが高級な会議だとする人たちがいます。

そこで第三回世界水フォーラムがどういうコンセプトで開催したかということをお話いたします。これまでの国際会議というのは、組織する人たちが、例えば水の問題なら下水処理、下水文化など、最初にテーマを決めて、それに

沿った議論をするというやり方でしたが、われわれは全く違う方法を導入しました。グローバルパートナーシップの総裁はボトムアップ、ランドアップだと表現して下さいましたが、要するに地球上で起こっている水問題をそのまま正確に反映するような会議にしたい。水に関する問題がすべて議論され、参加する人に地球上で起こっている水問題の全体像を持つてもらえる会議にしたいと考えました。

ご承知のように水の問題は縦割りになっています。役所だけでなく、学会、国際的な学会もそうですし、国際機関も縦割りです。水に関連する国連機関だけで二十三ありますが、すべて縦割りとなっています。水の問題が相互に競合しない場合はそれでもよかったのですが、限られた水をどう使うかということになったらそれはダメで、関連する専門家が一緒になって考えねばなりません。さらに第一回で、水の専門

家が集まっても問題はそこでは閉じませんから、もっと水に関連する分野の人が協力しないとダメだということになりました。

それで、地球上の色々な意見を持った人たちの意見を持ち寄ろうと、グループに分けました。最終的には九つのメジャーグループとなり、代表が集まると、地球上の意見がある程度は正確に、平等に反映できるのではないかという考え方です。多様な人たちが皆参加できるようなフォーラムとしたい、ということです。六十億人の地球人の考え方を第三回世界水フォーラムへ持つてこようということを基本理念とし、それをバーチャルフォーラムと水の声プロジェクトの二つを動かすことによってやろうとしたのです。要するに二〇〇三年三月十六日〜二十三日の八日間だけでなく三年間全体がフォーラムで、最後の八日間は皆が顔をあわせる期間だという考え方です。理念としてはすべての人に開かれ

たフォーラムである。単に参加者が参加するだけでなく、自ら作ってもらうフォーラムとし、そこから具体的な行動が出てくる。そういう考え方をしました。

その結果三五八の分科会が出来て、それを三六のテーマ・地域別に大別して議論を進めてもらいました。会議は夫々のテーマで、全体会合↓分科会↓全体会合という流れとしました。したがって、先ほどの民営化の例でいえば、賛成も反対も全体会合という共通のテーブルで議論した後、分科会を開いて議論をする。その上で更に全体会合を持って同じテーブルについてもらう。従来は賛成と反対が夫々別々に議論をしていたのですが、これを一つのところに集まってもらうことに重点を置きました。「三一の主要テーマ・五つの地域の日」ということで開いたのですが、下水道に係る問題としては直接的ではありませんが「水と都市の問題」、ある

いは「水供給と衛生及び水質汚染」というテーマ、「資金調達をどうするか」、「官民の連携問題」、「ユニオンパネル」（これは労働組合が開いたものですが）、他にジェンダーの問題など、色々な分野で下水の問題が議論されました。

民営化反対の人たちが会場を占拠したり、すべてが平穏無事に終わったわけではありませんが、幅広い議論が展開されました。フォーラムの成果としては色々な問題がありますが、今後「日本水フォーラム」の活動に下水文化研究会の皆様に個人あるいは会として参加いただき一緒に行動していただければ、ありがたいと思っています。

* 写真は、尾田栄章「セーヌに浮かぶパリ」東京図書出版会 2004 より転載